

## 韻律と言語特徴から見た *Bharateśvarabāhubalirāsa* の成立状況

山 畑 倫 志

### 1. はじめに

中期インド語の最新層にあたる言語であるアパブランシャ語 (Apabrahṃśa) は、6 世紀頃から 14 世紀頃まで北インドの各地において、主にジャイナ教徒によって使用されていた。地域的にも時間的にも比較的広い範囲で使用されていたため、種々の変異を含む言語となっている。しかし、現存する文献の大部分は、現在のグジャラート州とラージャスターン州を中心とした北インド西部において作成され、また、主だった作品が作られたのは 9 世紀から 12 世紀頃となる。創作活動の中心となった地域や言語特徴から見て、アパブランシャ語は北インド西部由来の言語であった可能性が高いが、実際に同地域の近代語であるグジャラート語やラージャスターン諸語との具体的な関係に対する言及は余り多くない。

本稿では、アパブランシャ語作品が多く作られ、また理論的にも整備された 12 世紀において、はじめて作成された古グジャラート語の作品である *Bharateśvarabāhubalirāsa* (BBR) [Jānī 1994] をとりあげ、ジャイナ教説話の伝承、使用韻律、そしてアパブランシャ語と古グジャラート語 (Old Gujarati) との関係の三つの点について検討し、その成立状況を考察する。

### 2. Bharata と Bāhubalin の説話

BBR の主題は第一祖師リシャバ (Rṣabha) の子であるバラタ (Bharata) とその弟であるバーフバリ (Bāhubalin) の争いである。ジャイナ教の神話的な偉人をまとめた六十三偉人ではリシャバを第一祖師、バラタを第一転輪聖王としているが、バーフバリはその中にはいない。この六十三偉人でもないバーフバリだが、最古のラーサ作品の一つである BBR において主要人物として取り上げられている。作者は十二世紀のジャイナ教徒のシャーリバドラスーリ (Śālibhadrasūri) であ

(244) 韻律と言語特徴から見た *Bharateśvarabāhubalirāsa* の成立状況 (山 畑)

るが、使用されている言語は古グジャラート語とされ、当時の地方語の最初期の使用例としても重要な作品である。第一祖師であるリシャバの息子であるバラタとバーフバリンの物語は、単独の作品となるのはこれが最初であるが、ジャイナ教の説話伝承において重要な型の一つであり、多くの行伝説話の中に採用されてきた。最初期に確認されるこの物語の型は3世紀の *Paumacariya* と考えられるが、この説話は様々な行伝説話に挿入されている<sup>1)</sup>。より後代に一般的になったものの概要を前後を含めて示すと以下のようなになる。

祖師となる前は王であったリシャバには百人の息子と二人の娘がいた。リシャバが出家を決めた際、長子のバラタに王国の全てを譲り、残りの九十九人の息子たちには共に出家するよう勧めた。リシャバが出家し悟りを得て、神々や人々にジナの教えを説いている間に、バラタは各地への遠征を続け、ついには最初の転輪聖王となった。しかし世界征服を終えたバラタがアヨーディーヤの都へ戻ってくると、兄弟の一人であるバーフバリンはリシャバに従わずバラタに抗い、自分の軍勢を組織し、兄バラタと戦争を始める。両軍の戦闘はこれまでに例を見ないほどの規模になり、両者とも多数の死者が出る。それを懸念した両者の大臣たちの懇願により二人は一騎打ちをすることになる。一騎打ちは目による闘い、海中の闘い、肉体による闘いの三つで行われ、最初の二つはバーフバリンが勝利した。三番目の肉体による闘いでもバーフバリンがバラタを圧倒し、打ち倒しそうになった瞬間、突如バーフバリンは自身の行為を後悔し、領地をバラタに譲り、出家し、最終的に悟りを得た。

細部の描写において白衣派と裸形派のそれぞれに属する作者で異なったり、また修飾要素が増加していくこともあるが、基本的な筋は変わらない。

### 3. 韻律形式から見たラーサ

*BBR* で用いられているラーサ (*rāsa*, *rāsā*, *rāsau*, *rāso*) という形式は、11世紀以前のアパブランシャ語文献にはほとんど見られない。それより以前、アパブランシャ語作品が頻繁に利用していたのは韻律書などでサンディ・バンダ (*sandhi-bandha*) と呼ばれる形式であった。サンディ・バンダとは、同じ韻の詩節で構成されるカダヴァカ (*kaḍavaka*) を一定数まとめてサンディとした形式である。

いくつかの詩論書や韻律書にはサンディ・バンダと並んでラーサー・バンダ (*rāsā-bandha*) という形式への言及があり、これが *BBR* のラーサと対応すると考えられる [山畑 2014]。12世紀のヘーマチャンドラ (*Hemacandra*) は文学理論書である *Kāvyaṃuśāsana* (*KA*) の 8.4 において歌謡 (*geya*) の一つとして *rāsaka* を挙げて

韻律と言語特徴から見た *Bharateśvarabāhubalirāsa* の成立状況 (山 畑) (245)

おり、またその注釈には次の記述がある。

多くの舞踊と結びつき、さまざまなターラやテンポが添えられる。64 の 2 ターラを用い、柔らかな動きから激しい動きへ変わるものをラーサカという<sup>2)</sup>。

9 世紀に *Paumacariu* (PC) を作成したとされるスヴァヤンブー (Svayambhū) の *Svayambhūchandas* (SC) 8.24, 25 ではより具体的な言及が見られる。

ガッター律、チャッダニカー律、パッダディカー律および他の素晴らしい韻律からなるラーサーバンダは美文詩のなかでも人々を喜ばせるものである。21 マートラで終わり、声を落とす。14 マートラでの休止が確実なガナの終わりである。素晴らしいラーサーバンダはこれで完成する。(各行を) 3つの短音節で終わらせればより美しい<sup>3)</sup>。

このような韻律書の記述に対して *BBR* の韻律は以下のような構成をとる。*BBR* は全体で 202 詩節で 14 の *ṭhavaṇi* に分けられる。[Jānī 1994: 54-55] にもとづいた *BBR* の韻律一覧を表 1 に示す。第 2, 5, 7, 9, 10 の *ṭhavaṇi* は末尾を *vastu* 律 (*mātrā* 律 + *dohā* 律 : 16 + 12 + 16 + 12 + 16 + 13 + 11 + 13 + 11) とすることで共通している。韻律書との関係から見ると、第 4, 5, 7 の *ṭhavaṇi* に見られる *caraṇākula* 律は *SC* がいくつか示している *ghattā* の一つと一致しているが、他に一致しているものは見られない。*KA* の記述のように、ラーサを舞踊に用いる歌のための形式と捉えれば、例えば第 14 *ṭhavaṇi* の詩節ほとんどが調子を整える “e” で終わっていることと対応する。全体として韻律の点では *BBR* はそれまでに整理された韻律をよく利用しているが、サンディ・バンダに対置されたラーサー・バンダという枠組みには必ずしも従っていないと言える。

(h)ṭhavaṇi	詩節	韻律	Svayambhū に対応
1	1-17 18-42	16 + 16 + 13 doharā	
2	43-76 77-78	soraṭhā vastu	
3	79-84	12 + 10	
4	85-89	caraṇākula	ghattā
5	90 91-94 95	11 + 10 + 11 + 10 caraṇākula vastu	ghattā
6	96-98	copāi	
7	99-103 104	caraṇākula vastu	ghattā
8	105-107	caraṇākula, copāi	
9	108-117 118-119	caraṇākula, copāi vastu	
10	120-136 137-138	roḷā vastu	
11	139-143	roḷā	
12	144 145 146 147 148 149 150 151 152	paṅkita × 4 paṅkita × 6 paṅkita × 4 paṅkita × 6 paṅkita × 4 paṅkita × 6 paṅkita × 4 paṅkita × 6 paṅkita × 4	
13	153-189	caraṇākula, copāi	
14	190-202	soraṭhā	

表 1. *BBR* 使用韻律一覧

(246) 韻律と言語特徴から見た *Bharateśvarabāhubalirāsa* の成立状況 (山 畑)

## 4. アパブランシャ語と古グジャラート語

複合動詞も含め、近代インド語では多く見られる特徴を含むアパブランシャ語は、北インドの広い範囲で使用が確認されるとはいえ、主たる地域は北インド西部であり、語の形態からみてもラージャスターン語やグジャラート語に近い。

	無標	回顧相 (完了相)	進行相	習慣相
未来	-e/isai -ihai			
現在	-ai	acchai V + PP	acchai V + Part	thakkai V + Part
過去		acch + PP V + PP thā + PP V + PP	acch + PP V + PP	thā + PP V + Part

図 1. アパブランシャ語の文法アスペクト (Bubeník 1998: 116)

中期インド語の最新層であるアパブランシャ語には、それまでの中期インド語にはあまり見られなかった言語特徴が多く含まれる [Bubeník 1998: 31]。その一つとして、複合動詞の発達がある。複合動詞が受け持つ機能は大きく分けて二つあり、一つは完了相や進行相など比較的体系的なはたらきをする文法的アスペクトであり (図 1)、もう一つは起動相 (～し出す) や完結相 (～しきる) など、より多様な形で動詞の示す動作の状況を表す語彙的アスペクトである。これらは近代インド語における動詞表現において重要な役割を示すものとなるが、アパブランシャ語においても多数の用例が見られる。

## 進行相

jaṇeri siri karapallava **dharivi thiya**

[KP 28.3.2 (Bubeník 1998: 109)]

母は頭に手を置いたままにしていた。

## 起動相

daddura **raḍevi lagga**

[PC 28.3.2 (Bubeník 1998: 112)]

蛙が鳴き出した。

特に起動相を示す動詞 lag (付着する)、動作の主体に向かう相を示す動詞 le (取る) は多く使われている。このような複合動詞によるアスペクトの表示は現代のインド諸語においても言語によって程度の差はあれ、広く見られる。そのため、上で述べたようにアパブランシャ語との関係が深いと考えられるグジャラート語

韻律と言語特徴から見た *Bharateśvarabāhubalirāsa* の成立状況 (山 畑) (247)

は、その歴史の初期段階においてアパブランシャ語の複合動詞の発展を受けていると想定される。そこで、本稿では最初期のグジャラート語を用いている *BBR* を対象に複合動詞の調査を行った。実際に *BBR* において出現が確認されるのは動詞 *hu* (コピュラ) と動詞 *thā* (立つ) の二つである。

**hu**

gaḍayaḍai gajadali sīhu āreṇi akala abīha  
dhasamasīya hayadala dhāi bhaḍahaḍai bhaya bhaḍivāi  
bhḍahaḍai bhaya bhaḍivāi bhuyabali **bhariya hui** jima bhīm̐bharī  
tahiṃ caṃdracuḍaha putra parabali apiu naravai nara naranarī  
vasamatīya naṃdaṇa vīra visamūṃ selasarama dikhāḍae  
rahu rahu re haṇi haṇi bhaṇe tū apaḍa pāyaka pāḍae [*BBR* 147]

象軍の中で、最前列において、とらえがたく恐れを知らない獅子のように叫んだ。彼は興奮して騎馬軍へと走りより、勇猛さで腕が(敵を)求めていた。腕に漲る力のために、勇猛さによって腕が(敵を)求めており、*Bhīm̐bharī* のように充ち満ちていた。そこで勇敢なチャンドラチューダの息子は敵方の王に戦いの呼びかけを行った。ヴァスマティーの勇敢な息子は堅固な岩の砦を指し示した。「踏みとどまれ、踏みとどまれ、打ち倒せ、打ち倒せ」と言って、鎧をまとわない(?)歩兵を倒した。

**thā (ṭhā)**

tava su jāmpai tava su jāmpai bāhubali rāu  
appaha bāha bhajāṃ na bala, paraha āsa kahai kavaṇa kijai  
su ji mūrakha ajāṇa puṇa avara dekhī baravayai ti gajjai  
huṃ ekallau samarabhari bhaḍa bharaḥesara ghāi  
bhaṃjaṃ bhujabali re bhiḍiya bhāha na **bheḍi na thāi** [*BBR* 104]

そのとき、バーフバリン王は言った。「自分の腕には力がなくなれば、他の者が何をなすべきか望みを言うだろう。その他の者を観察して、驕りから叫んでいるならば、愚かで無知であると(知らせるべきであろう)。強力な私は戦場においてよくバラタを打ちすえた。ああ、私は腕力で戦って打ち負かしたが、兄弟と戦ってはいない。」

bāhulika bharaḥesarataṇu bhaḍa bhāṃjaṇīya bhiḍīu ghaṇuṃ  
surasārī bāhūbali jāu bhaḍīu teṇa tahiṃ **phedīya ṭhāu** [*BBR* 163]

バラタの息子の戦士バーフリーカは打ち負かされながらもよく戦い、バーフバリンの息子スラサーリを打ち倒そうとしていた。

## 5. 移行時期のラーサ文献の特徴

ここまで説話内容と韻律と複合動詞の三つの観点から、グジャラート語による最初期の作品とされる *BBR* を見てきた。説話内容の点ではバラタとバーフバリンの物語はジャイナ教説話の中でも、筋が比較的単純で、兄弟の一騎打ちという英雄物語的な要素を含んでいるため、英雄物や戦争物を好みがちな後代のラーソー

(248) 韻律と言語特徴から見た *Bharateśvarabāhubalirāsa* の成立状況 (山 畑)

文学との関係を強く示唆する。

韻律の面では、既存の韻律を用いているが、必ずしもそれまでの韻律書にあるラーサー・バンドの定義に厳密に則っているわけではない。

以上述べてきたように、内容と韻律形式の点ではそれまでの伝統と接続させることが可能であるが、言語特徴については状況が異なる。中期インド語の最新層であり、新たな言語特徴を含むアパブランシャ語と近代インド語である古グジャラート語は、複合動詞の発展という点では必ずしも連続した関係は確認できない。

- 1) 3c: *Paumacariya* (Vimalasūri), 7c: *Vasudevahiṇḍī* (Saṅghadāsa, Guṇabhadra), *Padmapurāṇa* (Raviṣeṇa), 9c: *Paumacariu* (Svayambhū), 10c: *Ādipurāṇa* (Jinasena), *Mahāpurāṇa* (Puṣpada-nta), 12c: *Triṣaṣṭīśālākāpuruṣacarita* (Hemacandra).
- 2) *anekanartakīyojyaṃ citratālalayānvitam / ā catuḥṣaṣṭiyugalād rāsakaṃ masṛṇodhatam.*
- 3) *ghattāchaḍḍaṇīāhiṃ paddhāḍīāhiṃ suaṇṇarūehiṃ / rāsābaṃdho kavve jaṇamaṇa-ahirāmao hoi // 8.24 ekkavīsamattāṇihaṇau uddāmagiru, caudasāi vissāma hobhai gaṇaviraithiru / rāsābaṃdhu samiddhu eu ahirāmaaru, lahuatīalaavasāṇavirai aimahuraaru // 8.25.*

## 〈略号表〉

BBR Jānī 1994.

PC *Een kritische studie van Svayambhūdeva's Paūmacariu.* Ed. Eva De Clercq. Gent: Universiteit Gent, 2002.

KP *Der Kumārapālapratibodha.* Ed. Ludwig Alsdorf. Hamburg: De Gruyter, 1928.

KA *Kāvyaṃuśāsana.* Ed. Rasiklal C. Parikh. 2 vols. Bombay: Shri Mahavira Jaina Vidyalaya, 1938.

SC *Svayambhūchanda.* Ed. Hari Damodar Velankar. Jodhpur: Rajasthan Oriental Research Institute, 1962.

## 〈参考文献〉

Bubeník, Vít. 1998. *A Historical Syntax of Late Middle Indo-Aryan (Apabhraṃśa).* Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Jānī, Baḷvant, ed. 1994. *Bharateśvara Bāhubalirāsa.* Ahmedabad: Gujarat Sahitya Academy.

山畑倫志 2014 「ジャイナ教行伝説話とラーサー文学——インド西部の文学へのジャイナ教の影響」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社, pp. 460–468.

(平成 27 年度科学研究費補助金基盤 (C) 課題番号 13379340 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 *Bharateśvarabāhubalirāsa*, ラーサー, アパブランシャ語, グジャラート語, ジャイナ教文学

(北海道科学大学講師, 博士 (文学))